

EUの開発援助政策

EUとACP諸国（アフリカ・カリブ海周辺諸国・太平洋諸国）

外国語学部フランス語学科3年

鶴田美和

○はじめに

グローバル化が拡大し、国境がなくなりつつある今、ヨーロッパはEUという国境を越えた組織として日々変化している。そのようなEUという組織が活動を通してアマルティア・センの著書を通して学んだ貧困の本質というものをどのように捉えているのかということについて今回追求してみたいと考えた。よってECが発足して現在のEUとなるまでの開発援助に対するアプローチの足取りをたどっていきたいと考える。

○要旨

アフリカをはじめとする発展途上国と先進国の間には歴史的に特異な関係が存在していた。しかし、その関係が途上国の独立を機に形式的に終了すると共に今度は新たに援助国・被援助国としての関係が存在するようになり、援助の質も変容してきている。はじめは2国間協定だったが、ECという組織が成長するにつれ、それまでの国と国との援助の形とは別に多数国からなる組織対組織の形に変化してきた。そうすることによって財政的にも政策的にも大規模かつより有効な援助の形というものが実現しやすくなった。それが経済開発重視型から民主化を念頭に入れたグッドガバナンス型への移行である。この変化は援助側であるEUと被援助側のACP諸国の援助に対する見解が一致し、その結果が生み出されたものであるという点では評価はできる。しかしその一方で、いまだに西欧主義優位の社会体制、そして西欧文化と相反する地元文化の非融合からうまれてしまっている汚職などの援助を無意味のものとしてしまう独立後の社会構造が存在する現実がある。よってこれらの問題に焦点をあて、アフリカという地域的な特性を考慮しない限り、これからどんな改革政策をしたとしても真の開発は進まないと考える。よってエリート教育をする際に先進国の技術・知識を取り入れるだけでなく地元文化、そしてその中で生まれている社会構造というものを理解するような人材育成をすることがこれからもっとも必要とされることではないだろうか。

○調査方法

EUやNGO等のホームページ、書籍など

○構成

1. はじめに

2. EUにおける開発援助政策の沿革と現在
3. 現在の開発援助政策の目標と課題
4. EUとACP諸国
5. まとめ

参考文献

田中素香他著『現代ヨーロッパ経済』有斐閣、1988年。

内田勝敏、清水貞俊編著『EC経済論』ミネルヴァ書房、1988年。

JETRO『ヨーロッパ対外政策の視点』JETRO出版、1992年。

『援助の現実 the reality of aid 1998』国際開発ジャーナル社、1998年。